

井口直巳（井口直巳建築設計事務所 代表）

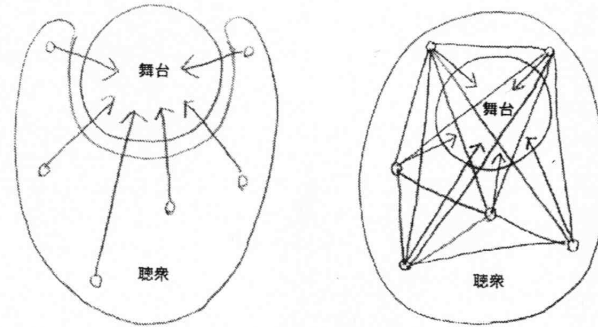
1. ワインヤード vs シューボックス

コンサートホールが、あたかもワインヤード vs シューボックスというステレオタイプに単純化されるようになったのは1980年代と思われる。サントリーホールとそれに対抗するように生まれたホールが、それぞれ一般の人たちへのイメージ戦略として使ったキーワードだった。またバブルが崩壊してからもしばらく続いた全国的なホール建設ブームでこの用語が広まっていった。しかしホールを研究している人たちには、劇場ホール小委員会の委員がおこなった座談会でも、サントリーホールが出現する以前の方がホールに色々なタイプがあったという意見の方が多い。（「音楽空間への誘い」 日本建築学会編 鹿島出版会 2002年刊 に収録）

このように広く一般の人たちにまで知られるようになった用語ではあるが、現実にある多種多様な音楽空間をこの二種類に分別するのは無理がある。実際には平行した壁面があればシューボックス、客席がステージを囲んでいけばワインヤードとされる誤解が広まってしまった。用語の定義は別の機会に譲るとして、日本人の大半が前者ではウィーンの楽友協会大ホールを後者ではベルリンのフィルハーモニーをイメージしているという共通認識があるのはたしかなようである。

2. Web系とHub系

前出の本の中で同一縮尺のホール平面を年表にした図（156頁）を作成した際に、私はWeb系とHub系という新しい分類方法をおこなった。これは音楽空間を考えるとときには平面形状ではなく舞台と客席との関係で区別すべきという私の考えに基づいている。観客と舞台上の演奏者を結ぶ線の他に、舞台を見つめる観客の視線に入ってくる他の観客とも線を結ぶことで視覚化される。Hub系では中心の演奏者と観客一人一人がハブのように結ばれ、観客は皆あたかも自分が演奏者を独り占めしている感覚の状況である。一方Web系では演奏者と観客を結ぶ線があった上で観客同士の視覚も含めた一体感が舞台上と同じくらいに感じられて生まれてくるウェブ状の感覚線が交錯している状況である。



Hub状の音楽空間の構造

Web状の音楽空間の構造

したがって観客席の照明を落としてしまえばワインヤードでもHub状にすることは可能で、H.v.カラヤンがBPOと製作した映像作品には、あのWeb系の典型のようなフィルハーモニーですら指揮者の一点から観客を完全に支配したHubの典型が見て取れる。一方で楽友協会大ホールでは舞台の両脇に観客を入れる事が良くおこなわれ、1階のバルコニー席もまるで歌舞伎の枡席のように観客の視線を浴び、VPOの定期公演はマチネでホール全体に自然光が溢れるなかではWeb状の音楽空間が醸成される。

3. 音楽空間の特性

照明などの舞台演出なしのコンサートで音楽空間としてWeb系かHub系かを考察すると、ホールの特性が良く現れてくる。シューボックスでも、紀尾井ホールなどのように1階左右にもバルコニー席がある典型的なものは観客相互のコンタクトは非常に高まる。東京芸術劇場大ホールは観客同士のコンタクトが希薄な空間構成で、舞台の左右にある一列の客席は演奏者には目障りだとむしろ評判が悪い。また東京オペラシティのコンサートホールはバルコニー席が高すぎて1階席とのコンタクトが難しいので一体感が生まれにくい。

最近の例では軽井沢の大賀ホールが660席の規模で五角形平面にした事が話題となっている。しかしここで注目すべきなのは舞台左右にある客席ブロックと、ホールを一周取り囲むようにつくられた2階バルコニーの立見席であろう。テスト・コンサートで立見席まで満席の状態を体験して、立見席と舞台左右の客席があるおかげで大賀ホールがWeb系の

代表的な中ホールになっていることを実感した。



4. 聴衆がもめているもの

Web系とHub系のどちらが良いかではなく、私自身コンサートで聴衆と一緒に感動したい場合もあり演奏者を独り占めした気になりたい時もあるように音楽の聴き方は一つではない。しかし自宅でも演奏をリアルに体験する技術が進歩した今日、あえてコンサートに出かける必然性として前者が求められているのは明白であろう。クラシックでないコンサートでは観客席全体がお祭り騒ぎをして一体感を盛り上げるのが通例にすらなっている。クラシックでは演奏中に静かに座っている観客の五感にどれだけWeb状の感覚線が張り巡らされていくかが重要な要素となってくる。これはまさに一期一会でありDVDでは不可能なライブならではの醍醐味でもある。

日本のコンサートホールは、どの席からも舞台がよく見えることを目指した多目的ホールの時代を経て、音楽専用ホールへのシフトで音響至上主義の時代があり、見やすいが音の薄いワインヤードと見にくい音の濃いシューボックスという迷信が生まれるに至った。しかし見やすさとはあくまで舞台のことであり、WebかHubかという観点から論じられたものではない。客席から舞台がどう見えるかは論じられても舞台以外の何が目に入っているかの研究は深まっていない。世界中でもっとも多様で数多くの音楽ホールを有している日本が取り組んでいく価値のあるテーマではなかろうか。

5. Web系音楽空間のために

では観客が舞台を取り囲みさえすればWebは醸成されるのだろうか。シューボックスの元祖ともいえる初代グヴァントハウスは客席が向き合う完全なweb空間であったように、観客相互の関係は従来の分類では判断できない。またサントリーホールの完

成直後に多くの演奏家が当惑したように、楽器には指向性があり平らとは限らない舞台上の演奏家相互のWebの研究も重要となる。観客の多くは演奏者との近い距離感を望むが、演奏者の好む聴衆との距離は多様である。こうした問題を踏まえつつ今世紀に入ってからミュージザ川崎や、ローマやロサンゼルスなどで2000席をはるかに越える規模でWeb指向のコンサートホールの完成が続いている。

ワインヤードかシューボックスかという不毛の議論の終焉とともに、音楽空間のありかたについて聴衆の醸し出すWebの中でのパフォーマンスをいかに高めることができるかという視点で、建築家のみならずホールに集うすべての人の英知を集める必要があるように思われる。

6. 出会い、お喋り、旨いもの

東京の北区で国際音楽祭をプロデュースしている時に、海外のマネージャーから日本ではチケットが一枚ずつしか売れないから大変だねと言われハタと気がついた事がある。確かに欧米の音楽文化の中では相手が決まっていなくてもチケットは二枚買うのが普通で私もそうしていた。コンサートには誰かを誘って行くので、お互いそうしている同士が会えばそこで新しい出会いが当然おきる。休憩時間はお喋りであつという間に過ぎ、どこかで一緒に旨いものでもということに相成る。

ホールの音響や見やすさ聴きやすさなど、優れた演奏空間に事欠かない日本にまだまだ足りないのが、こうしたコンサートホール全体の楽しみについてであり、それがWebを構成する重要な要素のひとつでもある。これはホールの内部だけを研究していても実現できない。また広さや豪華さの問題でもない。歌舞伎座と国立劇場のどちらの幕間が楽しいかは言うまでもないように・・・

井口直巳（いぐちなおみ）

日本大学理工学部建築学科、同大学院修了。文部省海外派遣研究員としてメソポタミアと中世西欧建築史を専攻。1981年にオマーン的首都マスカット再開発コンペで最優秀賞、恩田ヴィラ那須で1995年に栃木県マロニエ建築賞、山梨のCD小屋で2000年に日本建築家協会環境建築賞。NPO活動として、渡邊暁雄氏らとハーモニーの家を企画運営、北区の依頼で北とびあ国際音楽祭を創設しオーガナイザーとして企画運営をおこない、北区文化功労賞を受賞。登録建築家。足利工業大学非常勤講師。